

校長通信

第2号 令和6年5月1日

英検のススメ

先日第1回英語検定の案内がありました。今年は4月、9月、1月の3回予定されています。奮って受験して欲しいと思います。

今回は、英語検定に関するネットの記事をご紹介します。

この記事によれば、ここ数年の大学入試では、英検を取得しているかどうかを重視する大学が増えており、特に総合型選抜でその傾向が強くなっていると言います。

実際、総合型選抜を受けた受験生が、英語力を示す資格が不十分であるとして、1次試験の書類選考の段階で落とされてしまう場合もあります。

英検準1級は必須で、もし英検2級までしか取れていなければ、合格率が極端に下がるという大学もあります。また、一般入試においても、英検準1級を取得していれば、英語は満点とみなすとしている大学も増えているそうです。

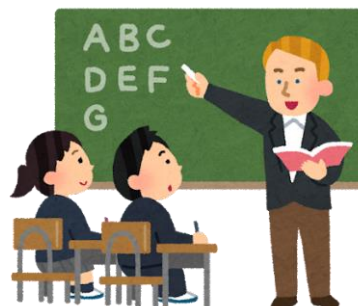
英検は年に3回も実施されるため、多くの子どもたちは「とりあえず次回受験してみようかな」「今はまだ、準備不足だし」と考えてしまいがちです。そうやって後回しにすると、その次のタイミングでもまた同じように、「まだ時期じゃない」と考えてしまいます。英検のような資格試験は、長距離マラソンのように勉強するのではなく、短期間本気で英検に向き合うと、合格率が一気に跳ね上がると言います。

英検は、大学入試ばかりではなく、就職に関しても有利になります。それは、高校でしっかり学習に取り組んでいた証（あかし）になるからです。

行廣先生が、校内で「塾」を開設しました。「魁」（さきがけ）というです。すでに10名前後の入塾者がいると聞いています。

漢字検定については、「漢字検定 WEB 講座」が本校生だけに開設されています。二人以上集まれば、「校長塾」の開設も予定しています。準1級までコミットします。

なお、漢字検定も英検ほどではないにしても、入試の出願時や選考時に評価する学校が増えてきました。詳しくは「漢字検定協会」のHPをご覧ください。



小論文の出題傾向

昨年度から特に、ChatGPTをはじめとする生成AIのことが話題になることが多くなったことから、このテーマで出題する大学が多くなって来ると予想していたとおり、「同志社大学」法学部では「裁判での生成AIの活用」というテーマが出題されました。裁判での活用というのは、法学部だからなのでしょう。今年は更に多くなると考えられます。自分が出願する学部学科で、どのように生成AIを活用するか、という出題に対する準備をしておくべきでしょう。

生成AIって何のこと？と思った人は、ひととおりの説明できるようにしておいてください。今の時代、調べる方法はたくさんあります。なんなら、ChatGPTに「〇〇学部の小論文試験で、〇〇での生成AIの

活用の仕方を問われたらどう回答したらよいか。◎字以内でお願いします。」とか「面接で聞かれたらどう回答したらよいか」尋ねてみたらどうでしょう。親切に教えてくれます。それも瞬時に。

ただし、ChatGPTの回答をそのまま使っても合格とはなりません。それは、採点者が見抜くからです。生成AIの文章は、容易にわかります。あくまでも参考程度にして欲しいと思います。

